

元獣医の令嬢は婚約破棄されましたが、
もふもふたちに大人気です！ 2

ルファリシオ

ジェーレントの王太子。
蛇神ヴァルセズと契約し、
邪悪で強大な力を
手に入れた。

エルザ

ロジェルリア公国の令嬢。
獅子族の獣人で、
美貌の持ち主。
アレクファートの従姉だが、
その出生には秘密が
あるらしく……

ユリウス

獣人の国・エディファンの
第一王子。
体が弱いため、王太子の座を
アレクファートに譲った。
聡明で温かな
人格者。

ルーク

アレクファートの側近。
心優しく穏やかな
青狼族の獣人。

アレクファート

獣人の国・エディファンの
第二王子。
獅子族の獣人で、正義感が強い。
王太子に就任し、ルナとともに
動物たちの保護に
奔走している。

ジン

旅先で出会ったお猿。
お調子者でお茶目。
シルヴァンの頭の上が
特等席。

シルヴァン

ルナの相棒の銀狼。
神獣の息子で、
人間の言葉を理解する
ことができる。

ルナ

公爵令嬢として生まれ変わった
元アラサーのゲームオタク。
婚約破棄された上に
国を追放されたため旅を始めた。
規格外の能力を持っており、
獣人の国・エディファンでは
聖女と呼ばれている。

CHARACTER
登場人物紹介

プロローグ

「うわぁ！ 綺麗な虹ね」

私は窓の外に見える空を見上げて、そう口にした。

今私がいるのは、獣人の王国であるエディファンの都、エディファルリアにある王宮の大広間の
中だ。

王宮の中でも一番大きなホールで、まるで西洋の大聖堂のように美しい。

私は今日、ここである人と婚約を果たした。

「ああ、まるで俺たちの婚約を祝ってくれているかのようだ」

「ほんとね。アレク」

私と一緒に空を見上げているのは、アレクファート・エディファン。

燃え上がるような赤い髪をしたエディファンの第二王子で、先程王太子に就任したばかりである。

獣人族でも珍しい獅子族の血を引いた、凛々しい貴公子だ。女性であれば、誰でも思わず彼に見惚れてしまうだろう。

私の左手にはめられた、今彼と婚約をした証である指輪が、大広間に差し込む光に煌めいている。

大広間に作られた祭壇の上から、多くの招待客たちの姿が見えた。

「エディファンの英雄、アレクファート殿下万歳！」

「王太子就任おめでとうございます！」

この婚約の儀の前に、王太子に就任したばかりのアレク。そんな彼に送られる大きな歓声が、大広間に響き渡る。

そして、私への言葉も。

「英雄アレクファート殿下と共に、この都をお救いになられた、聖女ルナ様万歳！」

「お二人に栄光あれ！」

その言葉に、私とアレクは思わず顔を見合わせながら苦笑した。

まるでファンタジーゲームの世界に入り込んで、ヒロインになったような錯覚を覚える。

私の名前はルナ・ロファリエル。ファリーンという国の公爵家に生まれた。

不思議なことに私には前世の記憶がある。詩織という名の日本人としての記憶だ。

今でこそブロンドの可愛らしい少女の姿をしているが、当時の私はアラサーで北海道で獣医師をしていた。

趣味は、親友の茜と一緒にやっていたネットゲームぐらい。

ジャージでお菓子をつまみながらゲームをしていた、だらしない姿は、アレクにはちよつと見せられない。

元アラサー女子にも、恥じらいぐらいはあるのだ。

「聖女なんて言われると、なんだかむず痒いわ」

「それは俺もだ。英雄などという柄ではない」

私たちの言葉に、傍に立っているアレクのお父様であるエディファンの国王陛下が、首を横に振る。

アレクに似ている精悍な顔立ちと、赤い髪が素敵なおじさまといった感じだ。

「何を言う。あの宰相バロフェルドの悪巧みが成功していれば、この都は怒り狂った一角獣たちの群れに蹂躪されていただであらう」

陛下の隣にいらつしやる王妃様も、微笑みながら頷いた。

「陛下の仰る通りです。あの時、アレクとルナさんが一角獣の王である聖獣オルゼルスの前に立ち、彼らを説得していなければ、この都には数百頭もの一角獣たちが雪崩れ込んでいたでしょう」

「王妃様……」

私は祭壇から大広間を見渡し、私の両親の傍に並ぶ、白く美しい白馬たちに目を向ける。

一際大きな体をしているのが、彼らのリーダーで聖獣と呼ばれるオルゼルス。

初めはこの国の騎士が、彼らの幼子を傷つけたという誤解があつて対立はしたが、それも解決して今は和解を成し遂げた。

すべてはこの国の王位簞奪を狙った、悪の宰相バロフェルドの企みだったのだ。けれど、アレクと私、そして仲間たちの活躍によりバロフェルドは今、檻の中だ。

「バロフェルド……あの時のことを思い出すとゾツとするわ」

血走った目で『覚えていろ』なんて言っていたが、冗談じゃない。

あんな男に怯えるなんてまっぴらだ。

私の言葉にアレクは肩をすくめる。

「まったくだ。ルナ、向こう見ずなお前が無茶をしすぎて、命を落とすのではと冷や冷やしたからな」

「あら？ 心配してくれてたんだ。知らなかったわ」

私はそう言って笑った。

初めて出会った時、アレクと大喧嘩をして、とても仲良くなれるとは思えなかった。

まさかその彼と婚約することになるなんて。

そんなことを考えていると、オルゼルススの隣にいる幼いユニコーンが、美しい白い薔薇を啜えてこちらに駆けてくる。

幼いユニコーンは、私にその白薔薇を渡すと嬉しそうに言う。

『ルナお姉ちゃん、おめでどう！』

『ありがとう、フィオル』

彼の名前はフィオル。

魔獣である一角獣たちの力は、普通の馬とは比べ物にならないほど強い。

中でも聖獣と呼ばれるオルゼルススの力は絶大だ。フィオルは城門を破ったオルゼルススの前に私たちと立ち、この都を守った一角獣の小さな勇者だ。

彼の姿に大きな拍手が大広間に響き渡る。

なぜ私がユニコーンのフィオルと話せるかというところ……

そう、私には不思議な力がある。それは動物たちと話すことができる力だ。

『フィオル、貴方のおかげだわ。あの時、貴方が必死に呼びかけて仲間たちを説得してくれなければどうなっていたか』

『だって、僕のことを助けてくれたルナお姉ちゃんが、仲間たちと戦うなんて絶対に嫌だったんだ！』

少し照れ臭そうに笑うフィオル。

自然が豊かなこのエディファンで、魔獣たちは本来なら保護の対象だ。

だけど、彼らの牙や角は非常に貴重で、密猟者によって闇で高値で取り引きされる。

その密猟者たちを操り、暴利をむさぼっていたのが宰相のバロフェルドだ。

私は密猟者に傷つけられたフィオルを治療したのだけれど、本当に酷い傷で、あと少し手当てが遅れていれば命を失っていただろう。

そんなフィオルを私の周りにいる動物たちが取り囲む。

一緒に大冒険を切り抜けてきた、大事な私の仲間たちだ。

フィオルとあの時のことを懐かしそうに話しながら、一緒に私を見つめる。

『ルナ、すごく綺麗だ！』

『ありがとう、シルヴァン』

そうやって大きく尻尾を振ったのは、私の相棒で弟のような存在の銀狼シルヴァン。実は神獣と呼ばれるセイラン様の息子で、幼い時に怪我を治してあげて以来、いつも傍にいてくれる。

『思えば祖国のファリーンを追い出されて、シルヴァンと一緒に旅に出たのがすべての始まりだったわね』

『ああ、まだそんなに昔の話じゃないのに不思議と懐かしいよな？ ルナ』

『そうね。ほんとに大冒険だったから。なんだかずっと昔の話みたいに思えるわ』

先程も話したように、私は前世では北海道で獣医をしていた。

ある日、仕事帰りに交通事故に巻き込まれて、この世界に転生して、ファリーン王国のロファリエル公爵家に生まれたのである。

そんな私の生活に大きな変化が起きたのは、十六歳のある日。当時の婚約者だったファリーンの王太子ジェラルドから理不尽な婚約破棄を突きつけられたのだ。

王太子妃の座を狙う伯爵令嬢イザベルの計略だったんだけど、それに乘せられて私に罵詈雑言を浴びせかけたジェラルドに嫌気がさして、私は国を飛び出した。

我儘で勝手なジェラルドには腹が立ったし、そんな人と結婚するなんてこちらだってごめんだ。そこで出会ったのが、私の可愛い仲間たち。

『ルナ、ほんとに綺麗！ ルナに読んでもらった絵本の中のお姫様みたい！』

『リン、ありがとう』

私の肩の上でそう言って、小さな手で私の頬に触れるのは白耳リスのリン。

いつも元気いっぱいのもつても可愛い子リスで、シルヴァンとの旅で出会った最初の友達なのだ。リンの母親のメルも傍にいます。

『素敵ですよ、ルナさん！』

そして私の足元でぴよんぴよん跳ねているのは、羊うさぎの姉妹、スーとルー。

ぐるぐる巻きの角が愛らしい。

『ほんとだ、お姫様みたい！』

『ルーも絵本で見たよ！』

最近寝る前に皆に絵本を読むのが日課だからね。リンたちは、特に動物やお姫様が出てくる話が好きで、ベッドの中で私が読む絵本を夢中になつて覗き込む姿が可愛いのだ。

シルヴァンの背中の上に乗る、白い猿のジンがそれを聞いて言う。

『へへ、お転婆のルナじゃないみたいだよな。馬子にも衣装つてやつだぜ。なあ、シルヴァン！』

『ちよっと、ジン。それどういう意味？』

私はジンを少し睨んでみせる。そして、顔を見合わせて笑った。

ちよっとお調子者だけど仲間思いのジン。

皆、旅の中で出会った大切な仲間たちだ。

その時、私の侍女のミーナが抱いている白鷲竜の雛が鳴いた。

「ジュオ!!」

まだ小さな翼をパタパタとさせて、こちらを見ている。

アレクと私の前で卵から孵ったこの子——ピピュオは、私たちのことを父親と母親だと思っ
てる。

ミーナの腕の中でもぞもぞと暴れるピピュオを、私は腕に抱いた。

すると、ピピュオは満足そうに丸くなる。

『ま〜ま！』

そう言っただきな頭を私の体に擦りつける様子は、思わずギュツとしたくなるほど愛らしい。

いつも凜々しいアレクも笑顔になっている。

「すっかり俺たちを父親と母親だと思っっているようだな」

「あら、この子にとつてもう両親は私とアレクよ」

「そうか。そうだな」

そう言っただアレクは笑みを深めると、私に誓いのキスをした。

婚約した今でも、こんな時はドキドキしてしまう。

「ルナ、ずっと俺の傍にいてくれ」

「ええ、アレク」

私はそう頷いて、くすくすと笑った。

「どうした？ ルナ」

「いいえ、なんでもない」

さつきも言っただけど、初めて出会った時、アレクと婚約するとは考えもしなかった。好きになる
なんてあり得ないと思っただけだ。

森の中で最初に出会った時、アレクは私を密猟者の一味だと勘違いして大喧嘩になったのだ。

すごく恰好いいけど、口が悪くて強引で、最初は正直言っただ苦手だった。でも、一緒に冒険する
中で彼の本当の優しさを知って、惹かれていった。

自分が誰かをこんなに好きになるなんて思いもしなかった。

前の世界では、親友の茜に男よりも動物にモテるなんてからかわれていたし、仕事も忙しくて恋
愛なんて無縁だったのだ。

でも、この人なら信じられる。宰相バロフェルドが引き起こした事件を力を合わせて解決し、
ジェラルドがエディファンに現れて、私に再び罵詈雑言を浴びせた時も私を信じてくれた。

前世も含めて結婚なんて初めてだけど、この人の妻になりたいと素直に思える。

そんなことを考えていた時、数名の騎士たちが大広間にやってきた。

アレクが率いる赤獅子騎士団の騎士たちだ。アレクは、突然現れた彼らに不思議そうな顔で尋
ねる。

「どうした？ お前たち」

「は！ 殿下。このような時に申し訳ございません。実は森でドラゴンが怪我をしているのを見つ
けまして、希少な魔獣ゆえ治療をしたいと思うのですが……：：：相手が相手だけにどうしてよいもの
かと」

他の騎士がそれに続いて口を開く。

「草食の大人しいドラゴンなのですが、怪我を負い警戒をしている様子で、大きな尾を振りかざし近寄ることができないのです」

私はそれを聞いて喜びの声をあげた。

「まあ！ ドラゴンですって！」

私は白鷲竜のピピュオ以外、他のドラゴンを見たことがない。

そのくらい、ドラゴンはこの世界で珍しい生き物なのだ。

「ねえ、アレク……」

そわそわしながらアレクを見上げると、彼はため息を吐いた。

「駄目だ、お前をそんな危険な場所に連れていくことはできない。大体、今は俺とお前の婚約式の最中だぞ」

「でも、私がいたら、そのドラゴンを説得できるかもしれないわ」

すると、傍で控えていたアレクの側近のルークさんがクスクス笑う。

「殿下、止めても無駄ですよ。ルナさんのそういうところを好きになったんでしょう？」

「ルーク！ お前まで……まったく。父上、母上、少し出かけて参ります」

国王陛下と王妃様も頷く。

「うむ、魔獣の保護は我が国の国是でもある」

「気をつけて行ってきなさい、アレクファート」

先程まで婚約式を途中で抜けだすことに渋い顔をしていたアレクが、あっさり部屋を出ていこうとする。

思いがけない行動に惚けていると、彼はこちらを振り返り、笑みを浮かべた。

「何をしているルナ、行くぞー！」

「え、いいの？」

「どうせ止めても行くのだろう？ 治療も必要になる、手伝ってくれ」

「うん！ アレク」

私の天職は獣医だ。怪我をしている動物の話の話を聞いたら、放ってはおけない。

アレクの方に一歩踏み出した時、リンが私の肩の上に駆け上がった。

「ルナ！ リンも手伝う」

『スーもだよ！ 薬草とか探すの得意なんだから』

『ルーも行く！』

三匹の様子を見て、ジンとメルもはりきった口調で言う。

『俺も行くぜ、ルナは俺がいないと駄目だからな』

『ふふ、ジンったら。私も行きますわ』

シルヴァンは私の隣に立ち、尻尾を大きく振った。彼も早く行きたくて、うずうずしているみたいだ。

『行こうぜ、ルナ』

『ええシルヴァン!』

お留守番になったピピオは、私たちを応援するように大きく鳴いた。ドレス姿で向かうわけにはいかないので、私はいつもの旅装になって、騎士団が用意してくれた馬車に乗り込む。

「ルナ、そろそろ行くとしよう」

「ええ!」

仲間たちも一緒に中に入り、馬車は快適に街道を走っていく。私はアレクに尋ねた。

「ねえ、アレク。その怪我をしたドラゴンがいる場所はここから近いの?」

「ああ、街道のすぐ近くのエネルギーの森だそうだ」

それを聞いて、私は思わず首を傾げた。

「そんなに都に近い場所にドラゴンが? 珍しいこともあるものね」

普通、彼らは深い森や谷のような人里離れた場所に暮らしていることが多い。

わざわざこんな場所にまで出てくるなんて、何かあったのだろうか。

同乗しているルークさんが、私の言葉に頷いた。

「東に青飛竜と呼ばれるドラゴンが住む谷があると聞きます。先程報告に来た騎士たちに詳しい話を聞いたところ、青い鱗を持つ小型のドラゴンだとのこと。おそらくはその一頭が迷い出たのでしょう」

「ああ、恐ろくな。だが腑に落ちないこともある。あの谷に住むドラゴンたちは、余程のことがな

ければあの谷を出ることはない。何かに追われているのでもなければな」

アレクもルークさんも、自然豊かなこの国の魔獣たちを保護しているだけあって、彼らの生念に聞いて詳しい。

どこに住んでいるのかもよく把握している。

でも、一つ気になることがあって、私は首を傾げつつ尋ねた。

「青飛竜のことなら、私もユリウス様の大書庫で見たわ。谷に生える特別な苔を主食にする比較的大人しいドラゴンで、資料もいくつか残されているって。でも、追われるって一体何に? 草食って言ってもドラゴンよ。彼らを谷から追い立てられる存在が、そういるとは思えないけれど」

ユリウス様というのはアレクのお兄様で、とても聡明なエディファンの第一王子だ。

本来なら王太子になるべき人物だが、生まれつき病弱なので、その任をアレクに譲ったのである。

アレクは私の言葉に頷いた。

「確かにルナの言う通りだ。俺の考えすぎかもしれん。単純に谷から森に迷い込んだだけかもしれんな」

「ええ……」

でも、気になるわね。騎士団からの報告では、そのドラゴンは翼に怪我をしていたという。

もしも、それがそのドラゴンを追っている者の仕事だとしたら。

馬車に揺られてしばらく街道を行くと、シルヴァンが急に耳をピンと立てた。

鋭い目つきで馬車の外を見る私の相棒。

『どうしたの？ シルヴァン』

『ルナ、聞こえないか？ 今、誰かの悲鳴が聞こえた』

その言葉に、私はシルヴァンが見つめる方角を見た。

『悲鳴って……』

スーとルーも大きな耳をパタパタとさせて、怯えたように私の膝の上に乗った。

『ルーも聞こえた！』

『スーもだよ！ 向こうから聞こえる』

私は羊うさぎたちの頭を撫でながらアレクに伝える。

「アレク、シルヴァンやこの子たちが向こうから誰かの悲鳴が聞こえるって！」

「悲鳴だと？」

その時、私の耳にも微かに聞こえてきた。何かの咆哮が。

怒りと憎しみに満ちた叫びだ。

アレクとルークさんにも聞こえたのだろう、二人は顔を見合わせて真剣な表情になる。

「殿下！」

「ああ、ルーク！ 今確かに何か就叫ぶ声が聞こえた」

アレクの言葉に頷くと、ルークさんはすかさず御者に命じる。

「ハミル！ 貴方にも聞こえたでしょう？ 急いでください！」

「はい、ルーク様！」

街道を駆け抜ける馬車の速度が上がっていく。

そして、先程の声は益々大きくなっていった。

私は拳を握りしめる。

「……苦しんでる。きつと報告にあったドラゴンだわ。何かに襲われて傷つけられてる」

手負いのドラゴンの悲痛な声。一体何があったの？

保護をしに行ったエディアンの騎士団が、そんなことをするはずがない。

「何かに襲われているだろ？ ルーク、どうなっている」

「分かりません、殿下！ 騎士団から手を出すことはないはず、一体何が起きているのか」

すると、前方に赤獅子騎士団の馬車が見えてくる。

保護した動物を運ぶための、大きな檻のついた荷馬車だ。

今回のドラゴンも応急手当てをした後、必要ならあれに乗せて都の治療院に連れていくつもりだったのだろう。

おそらく騎士たちは、この先の森の中にいるはずだ。

荷馬車の傍の木には、彼らが乗ってきたのであろう馬が数頭繋がれている。

「ガオオオオオン!!」

その時、一際大きな咆哮が辺りに鳴り響く。

まるで断末魔の叫びのようだ。

『ルナ!!』

シルヴァンの目が怒りに燃えている。その声が、助けを呼んでいるのが分かったから。私も思わず我を忘れてシルヴァンの背に飛び乗った。

「アレク、私先に行ってる！」

私を背に乗せたシルヴァンは、森の中へと駆けだす。

「ルナ！ 待て!!」

アレクの焦った声が後ろから聞こえてきた。それを振り切り、疾風のように森を駆け抜けていくシルヴァン。

木々の間を抜けて、少し開けた場所にやってくると、大きな動物が見えた。

『ルナ、悲鳴をあげていたのはあいつだ』

『ええ、シルヴァン!』

地面にぐったりと横たわる青い鱗うろこのドラゴンは、王宮の大書庫で見た青飛竜せいひりゅうの絵そのものの姿だった。

『間違いないわ！ きつと報告にあつた青飛竜よ』

でも、異様なのはその周りの光景だ。

ドラゴンの保護にあたつていたはずの数名の騎士が、一樣に地面に倒れているのである。

その中で唯一意識が残っていた一人が、こちらを見て呻うめいた。

「うう……なりません聖女様。危険です」

そう口にする、その騎士もすぐに気を失ってしまった。

その中央に、不気味な長身で黒髪の男が立っている。

シルヴァンが男に牙を剥く。

『気をつけろ！ ルナ、やったのはあいつだ。あいつから、あのドラゴンの血の匂いがする』

ドラゴンの翼の根元につけられた傷はとて深く、剣などの鋭い刃物によってつけられたようにも見える。

そして、男の手にしている剣にはべっとり血がついていた。

私はきつく男を睨む。

「貴方がやったの？」

「だとしたらどうだというのだ？ この竜は俺の獲物だ。誰であろうが俺の狩りを邪魔する者は許さん」

「狩りですって？」

異様なのはこの光景だけじゃない。

黒髪の剣士の顔には銀色の仮面がつけられている。

その下の顔を見ることはできないが、冷酷で残忍な瞳が、嘲あざむるようにこちらに向けられた。

男は静かに剣を構えると、冷めた声で私に言った。

「そうだ、死にたくなければそこで大人しく見ていることだ。俺の狩りが終わるのをな」

男はすっと目を細めると、その剣を瀕死のドラゴンの首筋に向かって振りかざす。

まるで獲物をしとめる姿を誇こ示じするように、ゆっくりと。

男の行動に、私は目を見開いて叫んだ。
「やめなさい！ そんなこと許さない！」
目の前に半透明のパネルが開いていく。
そこには、ゲームによく出てくるようなステータスが表示されている。

名前…ルナ・ロファリエル

種族…人間

職業…獣の聖女

E・G・K…シスターモード（レベル85）

力…112

体力…215

魔力…550

知恵…580

器用さ…337

素早さ…452

運…237

物理攻撃スキル…なし

魔法…回復系魔法、聖属性魔法

特技…【祝福】【ホーリーアロー】【自己犠牲^{せきせい}】

ユニークスキル…【E・G・K】【獣言語理解】

加護…【神獣に愛された者】

称号…【獣の治癒者】

私には動物と話せること以外に、もう一つ不思議な力がある。

それは前世でやり込んでいたオンラインゲーム、『E・G・K』エターナル・ゴールデン・キン
グダム…永遠なる黄金の王国のキャラクターの力が使えることだ。

この力のおかげで、私はアレクと一緒にあの残忍な宰相バロフェルドと戦うことができた。

私は、シスターの特技の一つである聖なる矢、【ホーリーアロー】を放つ。

「ホーリーアロー!!」

私の左手に構えられた光の弓から、勢いよく放たれた聖なる矢が男の頬をかすめる。

仮面の男はドラゴンから視線をはずし、こちらを眺めた。

「ほう、魔法の弓か？ 面白い術を使う。先程こいつらの一人がお前のことを聖女と呼んでいた
な。…そうか、お前がああ噂の聖女ルナか？ 今やエディファンの英雄と呼ばれているアレク
ファートと共に、バロフェルドを捕えたという女」

「だったらどうだって言うの？ それよりも大人しく剣を置いて！」

バロフェルドの名前を出すことは、きっと密猟者だろう。

でも、今まで出会った密猟者たちとは全く雰囲気が違う。剣の腕も身分も遥かに高いように思える。

私の言葉に、仮面の下で男の目が笑う。

「面白い。俺に向かってそのような口を利く女は初めてだ。だが、いつまでそうやっていられるかな」

黒髪の剣士はこちらに向かって踏み込むと、かすむように一瞬で消える。

それを見てシルヴァンが叫んだ。

『気をつけるルナ！ 来るぞ!!』

男は消えたのではなくて、こちらに向かって凄まじいスピードで近づいてきたのだとようやく気づき、私はもう一度【ホーリーアロー】を構える。

でも、そのあまりの速さに二の矢が間に合わない。

「くっ！」

シルヴァンが前に出て、男に牙を剥く。

見事なステップでそれをかわした男は、私の首元に向かって剣を一閃した。

背筋が凍りつき、死を覚悟したその瞬間――

鮮やかな赤い何かが、私を守るように前に立ちふさがる。

そして、その見事な太刀筋が黒髪の剣士の剣を弾き返した。

「アレク！」



「馬鹿者！ だから一人で行くなと言ったのだ」

私に背を向け、男と対峙したままそう言うアレク。

彼のたくましい背中を目にして、自然と胸が熱くなる。

私を追ってきてくれたのだろう、背後からは彼が乗ってきたと思われる馬の嘶いななきが聞こえた。

仮面の男は一度距離を取ると、再びその目に笑みを浮かべる。

「ほう、貴様がアレクファートか？ まさか俺の太刀筋を見切る者がいるとはな」

「貴様、何者だ？ ルナに手を出すものは決して許さん」

殺気立つアレクを見て男は、騎士から弓を奪い取り、それを構えるところちらに放つ。

剣の腕だけでなく、弓の腕も凄まじい。弓矢はアレクの心臓めがけて、勢いよく飛んでくる。

「くっ！」

アレクがそれを切り落とした時には、仮面の男は傷ついたドラゴンの方へと走っていた。

そして、ためらうことなく剣を振り下ろす。

「やめてえええ!!」

思わず私が叫んだと同時に、無情にも青飛竜せいひりゅうの細い首が切り落とされた。男の手にした剣が不気味に光る。

それはまるで息絶えたドラゴンの命を吸って、力を得たかのように妖しい光を帯びていた。

「ふふ、アレクファートまた会おう。俺の剣を受け止めたのは貴様が初めてだ。いずれ必ずけりをつけてやる」

男が指笛を吹くと、どこからともなく漆黒の馬が現れた。

そして男を乗せ、風のごとく去っていく。

「待て!!」

アレクはその男を追おうとしたが、私を守ることを優先したのだろう。唇を噛むと私の肩を抱いた。

「怪我はないか？ ルナ」

「ええ、私は大丈夫。でも……」

私は息絶えたドラゴンを見つめる。シルヴァンも怒りの遠吠えを放った。

『くそ！ なんてことしやがる!!』

あまりの光景に涙を流す私を、アレクはそっと抱き寄せる。

「あの仮面の男……ただの密猟者だとは思えん。一体何者だ？」

アレクはそう言って、男が消えた方を睨んでいる。

「酷いわこんなこと。絶対に許せない」

私は手のひらに爪が食い込むほど、強く拳を握りしめた。



しばらく後、先程青飛竜せいひりゅうの首が切り落とされた場所から離れた森の中で、ロープに身を包んだ一

人の男が佇んでいた。

茂みの奥から現れた、黒い馬に乗った仮面の男に、ローブを着た男は深々と頭を下げる。

「ルフアリシオ殿下、狩りの首尾はいかがでございましたでしょうか？ ドラゴン狩りなど自然豊かなこのエディファンでなければ中々できぬこと」

ルフアリシオと呼ばれた男は銀色の仮面をゆっくりと外した。

すると、端正な貴公子の顔が現れる。

「確かにな。我がジェーレントでは味わえぬスリルだった。アレクファート・エディファン、あの男はドラゴンなどよりも遙かに手強い」

ジェーレントというのは、エディファンと海を挟んだところにある大国だ。

商業と貿易で栄えている。

その言葉にローブ姿の男は驚いたように声をあげる。

「アレクファート。今噂のエディファンの英雄にお会いになられたのですか？」

「ああ、偶然だがな。傍には例の聖女もいたぞ」

ルフアリシオの言葉にローブの男はフードを取り、怒りをあらわに齒噛みした。

「アレクファートだけではなく、あの忌々しい小娘まで！ あの二人のせいでジェーレントの伯爵であるこの私は牢に入れられたのです！ 八つ裂きにしても飽き足らぬ連中が、今や英雄と聖女などともてはやされおつて！」

醜く肥えた体と血走った瞳で、唾をまき散らしながらなる。

そんな男の様子を見て、ルフアリシオははっと笑い飛ばす。

「それはお前が悪いのだ、バルンゲル。イザベルなどという小娘の口車に乗って、よりにもよってエディファンの王宮で騒ぎを起こしたのだからな。ジェーレントの王太子である俺が書いた親書がなければ、今頃お前はまた檻の中だ」

「はっ！ 殿下には感謝しております。ですが、あのバロフェルドが使えなくなった今、王太子であるアレクファートとあの女が婚姻を結べば面倒なことになりかねませぬ。あの男は金では動きません」

バルンゲルの言葉にジェーレントの王子は傲慢な笑みを浮かべた。

「慌てることはあるまい。いずれ、機会も巡ってくることだろう。俺はただ平穏だけを望む父上のような腰抜けではない。いずれはジェーレントを帝国と呼ばれるほどの超大国にしてみせる。そのために、バロフェルドを俺の傀儡としてこの国の王にさせるつもりだったのだがな。存外使えぬ男よ」

「ルフアリシオ様、牢にいるバロフェルドはいかががいたしましたでしょうか？ もしや殿下との関係を漏らしたりなどは……」

バルンゲルの言葉に黒髪の王子は静かに答える。

「奴もそれほど馬鹿ではあるまい。俺に逆らえば、死よりも恐ろしい未来が待っていることぐらい知っているだろう」

そう言いながら、ルフアリシオは先程ドラゴンにとどめを刺した剣を鞘から抜き放つ。

そして、残忍な顔で笑った。

「だが、先程ドラゴンの血を吸ったこの剣の力を試してみるのも悪くない。奴にはこんな時のために、印を刻んでいる」

「おお！」

ルファリシオの言葉に、バルンゲルは思わず声をあげた。

黒髪の子から立ちのぼる妖力。

ドラゴンの血を吸った剣がそれを増幅させていく。

ルファリシオの額に、九つの頭を持つ黒い蛇の紋章が漆黒の光を帯びて浮かび上がる。

「ふふふ、バロフェルドよ。悪いがもはや用済みのお前には死んでもらう。安心して死ぬがいい、いざれお前の恨みはこの俺が晴らしてやろう」

ルファリシオが不敵に笑った少し後、エディファンの都の地下に作られた牢獄の中では、牢番たちが慌ただしく駆け回っていた。

「だ、誰か来てくれ！ バロフェルドが……」

牢獄の一番奥にある独房の中で、嚴重な監視を受けていた邪悪な男が床に倒れ伏している。傲慢で邪悪な男の口から紡がれる呪詛の声が牢に響く。

「な、何故だ……ワシは貴方様に忠誠を誓ってきたではないか。何故そのワシを……ぐうう」その目は血走っており、右手は強く胸を押さえている。

断末魔の叫びをあげながら、バロフェルドは邪悪な顔で笑った。

「よからう、このワシの命を持っていくがよい。だが、これであのアレクファートの小僧もルナという小娘も終わりだ。あの方がいざれお前たちを……ふは！ ふははは!!」

狂気さえ帯びている笑い声に、牢番たちは背筋を凍らせた。

医師が駆けつけた頃には、この国の民の命を奪ってまで王位を狙っていた男は息絶えていた。

死してもなお奸悪な笑みを浮かべているさまが、恐ろしくおぞましい。

何かあった時のために牢に詰めていた医師が、衛兵と共に慌てて中に入り脈を取ると、首を横に振る。

「駄目だ、もう死んでいる。だが、一体どうして？」

外傷も見当たらない。

医師は不審に思っバロフェルドの服をはだけさせる。

「なんだこれは？」

バロフェルドの胸に黒い蛇の形をした痣を見つけ、医師は目を見開いた。

だが、気がつくとそのそれは幻だったかのように消えていた。

不思議な出来事に医師は目をこすった後、もう一度脈をはかる。

そして衛兵に伝えた。

「バロフェルドは死にました。早くこのことを陛下やアレクファート殿下にお伝えしてください」驚きを隠せない様子の衛兵は、頷くと急いで牢を出る。

王位を得るために、民の命さえ犠牲にしよとしたバロフェルド。悪の限りを尽くした宰相の死はその日のうちに国中に知れ渡ったが、もはや誰もその死を悼む者はいなかった。

第一章 前夜祭

バロフェルドの突然の死から半年後。

エディファンの都、エディファルリアは沸きに沸いていた。

城門の傍で、絵描きのアンナとその夫で大工の棟梁のダンが胸を張る。

エディファルリアを守るように取り囲む高い城壁、その正門の横には美しい壁画が描かれている。

「どうだい！ 私の一世代の大仕事は」

「ああ、大したもんだアンナ！」

ダンの部下である大工たちも一樣に大きく頷いた。

「すげえや姉さん！」

「やっぱり姉さんは都一の絵描きだぜ！」

それを聞いてアンナは首を横に振る。

「あんたたちは相変わらず言うことが小さいねえ。世界一の絵描きだつてことぐらい、言えないのかい？」

いつものアンナらしいそのセリフに一同大きな声で笑った。

アンナは腰に手を当てて城壁を眺めると頷く。

「まあ世界一つていうのは言い過ぎかもしれないけどさ。この絵だけはそのつもりで描いたんだ！」
アンナの言葉は、決して大げさではない。

事実、通りを歩く多くの人たちがその見事な壁画の前で立ち止まって、人だかりができています。

絵を描くために組み上げられた足場が、壁になって見えなかつた壁画は今、日の光を浴びて美しく輝いていた。

描かれているのは城門を破つて姿を現す、大きな一角獣。それはユニコーンの王オルゼルスだ。彼の美しい筋肉が余すことなく描かれている。

そしてその前に立ち、彼と戦うことなくこの都を守った二人の英雄。

エディファンの王太子のアレクファートと、聖女と呼ばれるルナだ。

傍には小さな勇者と称えられている、幼い一角獣のフィオルの姿もある。

ダンは、それを見上げながら言った。

「あの時、殿下と聖女様がいなかったら、今この都はどうなっていたか」

アンナは首を横に振って夫に答える。

「それだけじゃあない。あの小さな勇者も大したもんさ。バロフェルドの企みで怒り狂っている一角獣の群れに向かって、あの子が命がけで叫んでくれなけりゃ、あの時この都は何百頭ものユニコーンに蹂躪されてたんだ。相手は聖獣オルゼルスだよ、一体何人が犠牲になったことやら」

オルゼルスの前に立つ聖なる少女の姿に、通りかかる者は皆見惚れている。そして、彼らは口々に声をあげた。

「それにしても今日はなんてめでたい日だ」

「ああ、明日婚姻の儀を迎えられる、アレクファート殿下とルナ様を祝う前夜祭だからな！」

「待ち望んだ、俺たちの国の王太子妃の誕生だ！」

アンナはそれを聞いて大声で笑った。

「今日は飲むよ！樽たるに酒を入れて持つてきな！」

「ははは、姉さんには敵かみわねえや。絵もそうだが、酒の強さときたらほんとに世界一かもしれねえよな！」

ダンたんは腹を抱えて笑いながら答える。

「そりゃちげえねえ！」

「ちよっと、あんたたち！」

都の大通りには出店もずらつと並び、いつもよりさらに活気づいている。

それを眺めながらダンたんは言った。

「それにしても、ルナ様はどこに行ったんだろうな？今朝方、殿下と何処かに馬車で出かけられたって話だが」

それを聞いてアンナが呆れたようにダンたんに答える。

「そんなの決まってるじゃないか。二人が初めて出会った場所さ」

アンナはそう言うと、ルナがいるであろう場所の方角を、目を細めながら眺めた。



私は今、とある生き物の背に乗って、森の中を駆け抜けていた。

懐かしい森だ。バルロンという大猪いのししの魔獣が治めている、都の西にある大きな森。

私は、いくつかの薬草が詰まったカバンを背負い、胸元にはスーとルーを入れるための特製のバッグを提げている。

そこから頭を出してルーたちが言う。

『ねえルナ、薬草これで足りるかな？』

『スー、もつと一杯生えるところ知ってるんだよ』

薬草探しがうまいスーとルー、私は彼女たちにお礼を言った。

『ありがとう、二人とも。でもこれだけあれば十分だわ。早く帰らないと。ミーナが森の治療院で待っているもの』

私の肩の上で、小さなクルミのような木の実を持っているリンが頷く。

『きつとみんな待つてるよね、ルナ！』

『そうね、リン！でも思い出すわ、この森をこうやってリンを乗せて走っていると』

初めて出会った時も、メルのために薬草を探した後、こうやって森の中を駆け抜けていたっけ。

ジンを自分の背に乗せて、隣を走っているシルヴァンが頷く。

『ああ、あの時もそうだったよな』

『そうね、シルヴァン！』

一つだけ違うことがあるとしたら、あの時は私やリンはシルヴァンの背中に乗っていたっていうこと。

でも今は……

『ママ、リンお姉ちゃん！ 急ぐんでしょ？ あの崖を飛び越えるから、しっかり掴まってて』

『ええ、ピピユオ。お願い！』

そう言っただけこちらを振り返る顔は、まだあどけなさを残していて可愛らしい。

でも、すっかりと大きくなり、純白の羽毛がもふもふとしてとても心地いい。

そう、今私が背に乗っているのは白鷺竜のピピユオだ。

婚約式の時は私の腕に抱けるほど小さかったのに、あれから半年が経ち、すっかり大きく成長した。

白鷺竜は成長期に入ると、一気に体が大きくなることは文献を読んで知っていたけれど、その成長ぶりは私も驚いたぐらい。

大人になればもっと大きくはなるものの、今でも私一人ぐらいなら軽々と背中に乗せてしまう。

普通の鷺とは違って、地面を駆け抜けるのも馬よりもずっと早いぐらいだ。

まだ幼いといっても、流石はドラゴン族ね。

それに――

行く手を遮る大きな崖を目の前にして、ピピユオの白い翼が大きく開いていく。

『いくよ、ママ！ シルヴァンお兄ちゃん、ジンお兄ちゃん、先に行ってるね』

『ああ、ピピユオ！ また治療院でな』

『ちえ、空を飛べるなんてずるいぜ』

ジンを乗せたまま崖を迂回するようにルートを変えるシルヴァンに対して、ピピユオはそのまま崖に向かって大きく羽ばたいた。

ふわりと宙に舞い上がる感覚がする。

『うわあ！』

これが初めてじゃないけれど、やっぱり何度体験しても思わず声が出てしまう。

軽々と崖を越え、信じられないくらい壮大な光景が眼下に広がる。

バルロンが治める広大な森を、私たちは大空から見下ろしていた。

リンも興奮気味だ。

『ピピユオ、凄い凄い！』

スーたちも私の胸に下げた袋から顔を出して、夢中になって景色を眺めている。

『ほんとに信じられないわ。ドラゴンの背中に乗って空を飛ぶなんて、まるでゲームの主人公になっただけ』

私が茜とやっていたMMOゲームの『E・G・K』にもいろんな乗り物が出てきたけど、やっぱり

りドラゴンに乗ってゲームの世界を旅するのは楽しかった。

でも、これはそれとは比較にならない。なにしろ実際に自分が大空を飛んでいるのだから。何度経験しても胸が躍る体験だ。

ピピユオは羽ばたきながらこちらを振り返ると、不思議そうに首を傾げる。

『ゲームって？』

『え？ こほん……な、なんでもないわ、ピピユオ』

『変なママ』

ピピユオにゲームの説明をしても伝わるわけがない。

それに、こんな話をしていると、仕事終わりにだらしない姿でネットゲームをしていた自分を思い出してしまう。

私だって、ピピユオの前では素敵なママでいたいのだ。

『それにしても凄いわ。保護区が一望できる』

私は改めて眼下に広がる森を眺める。

保護区というのは、この広大な森の中に作られた動物たちの保護地域のことだ。

ここには密猟者に傷つけられた動物たちや、病気や怪我を負って治療が必要な動物たちが毎日のように運ばれてくる。

婚約式から半年、アレクと協力して作った動物たちの楽園だ。

アレクが率いる赤獅子騎士団のもとで管理され、エディファンの動物の治療師たちが何人も働

ている。

ピピユオは保護区の上を大きく旋回すると、地上に見える小さな建物を目指してゆつくりと舞い降りていく。

『パパだ！ ねえ見てママ！ 治療院の傍にパパもいるよ！』

『あら、本当ね！』

白鷲竜のピピユオの目は、人間なんかより遥かに遠くの物がしつかりと見える。

私にはまだほんの小さくしか見えないアレクの姿も、はつきりと見えているのだろう。

嬉しそうに大きく翼を羽ばたかせる。

『ピピユオったら、本当にパパのことが好きなのね』

『うん！ 大好き！』

森の中にある開けた場所に作られた治療院、そのすぐ傍にピピユオは見事に舞い降りる。

そして、私たちを乗せたままアレクのもとに駆け寄った。

『パパ！』

『ピピユオ、ルナと一緒にだったのだな』

『うん！ お姉ちゃんたちと一緒に薬草を取ってきたんだ』

白鷲竜のピピユオは賢くて、もう人が話す言葉を覚えてしまった。

だからアレクの言っていることもしつかりと伝わっている。

体は大きいけれど、アレクと私にとっては大事な息子だ。

ルークさんを連れてここにやってきたアレクに、私は尋ねる。

「早かったのね、アレク。もうお仕事は終わったの？」

「ああ、明日は俺たちの婚姻の儀がある。婚姻を結べば、しばらくはお前もここには顔を出せなくなる。その前に、仕事の引継ぎをしなくてはならないとは思ったが、皆すっかり準備はできている様子だった」

ルークさんの傍にいる動物の治療師たちの長が口を開いた。

「聖女様が妃殿下になられましたら、今までのように足しげくここに通っていただくこともできなくなるでしょうから、人員の増強など私たちも前から準備をしていたのです」

アレクと治療師長の言葉に私は口をとがらせる。

「別にいいじゃない。王太子妃になったからって、王宮の中に閉じこもっているなんて退屈だわ」

「駄目だ。まったく、どこの世界にドラゴンの背中に乗って大空を駆け回る王太子妃がいる？」

「何よ、そんな私がよくて結婚するんでしょ？」

私たちのやり取りを見て、ルークさんがこらえ切れない様子で笑った。

「ご安心を、ルナさん。なるべくここにも来られるようにいたします。ただ妃殿下としての公務もございますから、少しだけお控えいただければ」

「そう、ルークさんが言うなら」

青い髪の穏やかな貴公子、ルークさんに言われるとつい納得してしまう。

確かに正式に王太子妃になれば、色々仕事も増えるだろう。

でも、獣医は私の天職だから、やっぱりここには足を向きたい。

ピピユオがそんな私の耳元で囁く。

『大丈夫だよ、ママがここに来たくなったら僕が内緒で連れてきてあげる。パパだってお空まではついてこれないでしょ？』

『そうね！ ピピユオ、うるさいパパは置いていきましょう』

顔を見合わせて笑う私とピピユオの姿を見て、訝しげな顔をするアレク。

「何か企んでいる顔だな、ルナ。今のうちに正直に話しておけ」

「さあ？ なんのことだか」

私とピピユオはソツポを向いて誤魔化した。

ドラゴンに乗って世界を駆け巡る王太子妃が一人ぐらいたって、別にいいじゃない。そんなことを考えていると、治療院の中から侍女のミーナが姿を現す。

手には大きな蒸し器を持っていて、その中からとてもいい香りがこまで漂ってきた。

「ルナ様、お帰りになってたんですね。お言いつけ通り、準備して待っていたんですよ」

「ありがとう、ミーナ！ 助かるわ」

そう言って、治療院の前に置かれた大きな机の上にその蒸し器を置いて、ふたを開けるミーナ。そこにはサツマイモに似た美味しそうな芋が、しつかりと蒸かされて並んでいる。

私の胸元のバッグから顔を出して鼻をひくひくさせて、スーとルーは言った。

『美味しそうな匂い！』

『ほんとだね、ルー』

私はそんな羊うさぎたちの頭を撫でた後、バッグから出すと腕まくりをする。

「さあ、ミーナ始めましょう！　すぐに匂いにつられてあの子たちがやってくると思うから」

「ええ、ルー様！」

私とミーナは手分けして、よく蒸された芋をしっかりとすりつぶして裏ごしする。

そして、仲間たちと一緒に取ってきた薬草をすり鉢ぼちですった後に、よく芋と混ぜ合わせていった。そんな作業をしていると、近くで遊んでいた小さな猪いのししの子供たちがこちらにやってくる。

あつという間に私の足元に集まってきた可愛いうり坊たちは、こちらをつぶらな瞳で見上げるとおねだりする。

『ルナのお団子の時間だ！』

『うわあ！　早く食べたいよ』

私はそんな子供たちに、まるで幼稚園の先生にでもなったかのように言った。

『はい、みんな並んで！』

私がそう言うと、目の前にうり坊たちが並んでいく。

先頭に立って私を見上げているのは、一番小さな女の子のうり坊で名前はモモ。

『ルナあ、モモちゃんと並んだよ。だから、いつものお団子頂戴！』

うり坊と言っても、普通の猪いのししの子供ではない。大人になれば、とっても大きくなる猪いのしし型の魔獣ジャイアントボアの子供たちだ。

だけどもまだ子犬ほどの大きさで、すごく可愛い。

『偉いわね、モモ。はい、じゃあこれ今日のお薬』

私はそう言って、右手に載せた黄色いお団子をモモに差し出す。

ジャイアントボアの好物のコル芋をしっかりと蒸して裏ごしした後、いくつかの薬草を混ぜて作った特製のお団子だ。

私は今、とある治療を行っている。

このお団子はモモたちにとって美味しいご馳走でもあるし、薬でもあるのだ。

『うわああい！　ルナ、ありがとう』

モモはそう言って、私の手の上のお団子を食べる。その鼻先が私の手のひらに当たってくすぐったい。

お芋の団子をぺろりと平らげて、つぶらな瞳で私を見つめる。

『美味しいよルナ！　……でも、もうなくなっちゃった』

そう言ってしょんぼりとするモモは、とっても可愛らしい。

私はそんなモモの頭を撫でながら笑った。

『すっかり食欲も戻ったわね。これならもう大丈夫』

『えへへ、だってルナのお薬とっても美味しいんだもん！』

私の足元に体をすり寄せて嬉しそうに笑うモモの姿は、周囲を和ませてくれる。

私はその場にしゃがむと、モモを抱き上げて他の子供たちにもお団子を配った。

皆夢中になって食べている。

青斑熱せいはんねつという流行病はやりびにかかっていたジャイアントボアの子供たち。

この病の特徴は、肌のできる青い斑点はんてんと微熱、そして食欲不振だ。

免疫力の弱い子供たちの間で感染して広がっていく、この世界の猪系いのわじの動物に多く見られる病だ。放っておくと、重症化して高熱を出して苦しむこともある。モモのような小さな子供の場合には、命に関わることもあるのだ。

なんとか薬草を食べさせようとしたのだが、それだけだと苦くて吐いてしまう。

そこで考えたのがこのお団子作戦だ。

『ルナ、ありがとう！』

『とっても美味しいよ！』

可愛いうり坊たちに囲まれていると、ふと前世のことを思い出す。

茜の家の牧場でも、こんな風に羊たちに囲まれていたっけ。

そんなことを考えていると、さつき崖のところまで別れたシルヴァンがジンと一緒に戻ってきた。

『まったく、こいつらすっかり元気になってさ。目を離すとウロチョロと動き回るから、時々誰かがいなくなったりして探すのが大変なんだからな』

『ありがとう、シルヴァン！ いつもご苦労様』

リンが元気よく地面に飛び降りると、モモの頭の上に駆け上がる。

『ルナ、この間リンが集めたクコルの実も役に立った？』

『ええ、リン。お団子の中にしつかり入ってるわよ。みんな、リンにもお礼を言ってね』

モモたちは、短い尻尾を揺らしながら、リンにお礼を言った。

『ありがとう！ リンお姉ちゃん』

『えへへ、みんな元気になってよかったね』

木の実を集めるのが得意なリン。そんな彼女が探してくれた木の実も、砕いて、中身を芋と蒸して練り込んでいる。

そんな話をしていると、森の奥から大きな猪いのわじが姿を現した。

この森の主であるジャイアントボアのバルロンだ。

モモはその姿を見て、嬉しそうに駆け寄っていく。

『じいじ！ モモ、ルナにお団子貰ってんだよ』

『おうおう、そうかモモ。すっかり元気になって、じいじも嬉しいぞ』

いつもは威厳たつぷりの森の主も、孫娘の前ではすっかり気のいいお爺おじいさんだ。

バルロンは私に頭を下げる。

『ルナ、すまんのう。モモたちの治療をしてくれて感謝するぞ』

『いいのよバルロン。安心して、もうみんなすっかりよくなったわ』

私はモモたちを眺めながら続けた。

『この子供たちの免疫力を高めるには、クコルの実とマルーラ草の葉が一番。モモたちが大好きなクコル芋を蒸かして、一緒にお団子にすれば、薬剤の苦みも消えるしみんなも食べてくれるんじゃないな』

いかつて』

それを聞いてバルロンは顔をしかめる。

『なんじゃ。わしの治療の時はえらく苦い丸薬をこしらえたくせに。そんなことができるのなら、わしの時にもしてくれればよかったではないか』

『贅沢ぜいたく言わないで。あの時は貴方を狙う密猟者たちが、すぐ傍に迫ってたでしょう？ そんな大きな体をしてだらしがないんだから』

私はきちんとバルロンの大きな鼻を叩く。

それを見て、モモが楽しそうに笑った。

『じいじ、ルナに怒られた！』

『がはは！ まったく、ルナには敵なわんのう』

そう、バルロンとは密猟者たちと初めて対決した時に出会った。

私が今いる獣人の王国エディファンでは、魔獣たちは保護されているのだけれど、その貴重な角や牙などを求めて密猟者が後を絶たない。

そんな密猟者に傷を負わされたバルロンの治療をし、一緒に戦ったのが、彼との初めての出会い。私はバルロンに笑みを向ける。

『バルロン、ありがとう！ この森を、傷つけられた動物たちの保護に使わせてくれて』

『わしは人間は嫌いだ、ルナよ、お主は違うからな。遠慮はいらん、存分に使ってくれ』

この森はエディファンの都エディファルリアからも近く、保護区として使うにはとても便利だ。

バルロンが私たちを仲間だと認めてくれたおかげで、今、ここには沢山の動物たちが保護されている。

『そういえば明日だな、あの男との婚儀は。まさかあの時は、お前とあの男が結婚するなどは考えもしなかったわい！』

そう言っただけで豪快に笑うバルロン。

私も思わずつられて笑う。

『私も。覚えてるでしょ？ あの時、彼ったら私のことを密猟者だって勘違いして捕まえようとしたのよ』

『がはは！ そうじゃったそうじゃった。それでリンたちも憤慨して、都について行くと言い始めたんじゃないな』

その言葉に、私はふと昔のことを思い出した。そう、彼と出会ったのもこの森だった。

リンも、その時のことを思い出したように頷いた。

『だって、ルナを連れて行こうとしたんだもん！ 初めはリン、アレクのこと大っ嫌いだったんだから』

『リンったら』

『えへへ、でも今は好きだよ。ルナのこと守ってくれたし、ルナが大好きな人だもんね！』

リンの言葉に私は、頬に熱が集まるのを感じた。

ルークさんが申し訳なさそうに私に言う。

「ルナさん、彼らとお話しのところ申し訳ありませんが、そろそろ王宮に戻らなくては」

「あら、もうそんな時間？」

ルークさんが私に頷く。

「ええ、少し余裕を持って戻った方がいいでしょう。夕方からは、明日の式典の前夜祭も始まりますから」

「ああ、衣装合わせもあるだろうからな」

アレクの言葉にミーナが大きく頷いた。

「ええ、そうですね！ まったく、ルナ様ときたらいつまでも旅姿を好まれて。今日こそビシッとドレスを合わせていただきますよ。妃殿下となられる方の衣装ですから、私の侍女としての^{こけん}沽券にも関わります！」

半分冗談めかしながら、腰に手を当てて私を見るミーナ。

前世が前世だけに、ドレス姿は苦手なのよね。ジャージとは言わないけど、ラフな格好が性に合っている。

だけど、ミーナの様子を見るに、衣装合わせは逃れられそうもない。

「ふう、そうですね。分かったわ」

観念した私はバルロンやモモたちに別れを告げる。

『それじゃあ、バルロン、モモ。それにみんな、またね！』

『うん！ ルナ、ありがとう』

『またいつでも来い。今度は獣人の国の王太子妃としてな』

『ええ、バルロン』

私たちはバルロンたちに手を振って、森の治療院を後にする。

少し開けた場所に出ると、そこには沢山の動物たちの姿が見えた。

この保護区で暮らす動物たちだ。私は馬車が停めてあるはずの森の外れの街道に向かいながら、アレクに尋ねる。

「やっぱりまだ密猟者たちはいるのね」

以前より密猟者に傷つけられた動物たちの数は減ったものの、やはりまだここに運ばれてくる。

「ああ、バロフェルドの死で連中の動きも収まってきたと思ったのだがな」

「確かに妙な話です。バロフェルドが死んだことで、完全に後ろ盾を失い、すべてを素直に吐くと思っただけですが……奴が捕らえられてかなり経つというのに、多くの者は何かを恐れるように口をつぐんでいる」

私は首を傾げながら尋ねた。

「ルークさん。恐れるって何を？」

「それは分かりません。私の考えすぎかもしれませんが……」

変な話ね。この国で暗躍する密猟者を陰で操っていたのは、バロフェルドのはずだ。

仲間やアレクたちと一緒にあの男を捕えた今、他に密猟者たちの口をつぐませるような人物はいないと思うけど……

私が眉をひそめていると、シルヴァンの背中に乗っているジンが、胸をドンと叩いた。
『なあにへっちゃらさ！　どんな悪党が出てきたって、このジン様がバロフェルドの時みたいに退治してやるぜ』

それを聞いて、スーとルーが呆れ顔になる。

『ジンはあいつに捕まってたでしょ？』

『そうだよ。ルナに助けてもらってたもん』

『ちえ！　そう言うなって、俺だってあいつの顔をひつかいてやったんだからさ』

私はクスクスと笑いながらジンの頭を撫でた。

『そうね！　あの時のジンは勇ましかったわ』

『へへ、だろ？』

そう言っただけ胸を張るジンを見て、私たちは顔を見合わせながら笑った。頼もしい私の仲間たちに、自然と心も軽くなる。

私はアレクに提案する。

「ねえ、アレク。私にできることがあったらいつでも言ってみてね？」

ぐっと拳を固めて詰め寄る私を見て、アレクはため息を吐いた。

「まったく、相変わらずだな。明日にはこの国の王太子妃になるといふのに、お前にそんな危険なことをさせられるわけないだろう？」

「何よ、いいじゃない。あの時だって一緒にバロフェルドをやっつけたんだから」

「駄目だ。少しは王太子妃らしくなってくれ」

アレクは額に手を当てて、首を横に振った。私がそんな彼に向かって小さく舌を出すと、ルークさんが大笑いする。

「殿下の負けですね。ルナさんのことですら、どうせじつとしてはおられないでしょう」

「仕方ない奴だ。保護区の動物たちの治療ぐらいであれば、いつでも自由にできるように手配しよう」

「ほんとに？」

王太子妃になったからって、王宮の中にならずにいるのは私の性分に合わない。

そんなの退屈だし、これは私の大切な仕事だ。

傷ついている動物がいるのなら、癒してあげたい。

私たちは森を出て、近くの街道に停めてある馬車に乗り込んだ。

そして、エディファンの都のエディファルリアへと向かう。

体が大きくて馬車に乗れないピユオは、私たちが乗った馬車に並走して駆けていく。

そのまましばらく走ると、高い城壁に囲まれた都が近づいてくる。

その城門の前に大勢の人だかりができていた。

「何かしら？　ずいぶん人が集まっている様子だけど」

私の問いにルークさんが答えてくれる。

「殿下とルナさんがお出かけになられたと知って、戻られるのを待っているのだと思います。前